



## 『学びと成長調査で読み解く学びの道筋:多角的考察から見える成長のヒント』

### はじめに

立命館大学では、学部生および大学院生を対象に学習到達度や学習経験等の学びを振り返る機会として、2015年度より(※大学院生版は2021年度より)「学びと成長調査」を実施しています。これまで本調査結果を活用して大学の教育改善に役立ててきました。

2024年度で「学びと成長調査」の実施から10年が経過し、立命館大学では新たな視点から調査結果を再考察が必要と考えています。特に、2020年からのコロナ禍による教育環境の急激な変化は、学生の学び方や学習意欲に大きな影響を及ぼしたのは記憶に新しいところかと思います。オンライン授業の導入やハイブリッドな学びの試行が進む中で、学生がどのように適応し、成長してきたのかを把握することが今後の教育改善に不可欠です。また、コロナ禍での学びの変化を通じて、柔軟な学習環境の必要性や学生の主体的な学びへの取り組みの重要性が再認識されました。

そこで今回は、教育・学修支援センターに所属する3名の教員が、それぞれの専門的視点から調査結果を独自に分析し、レポートを作成しました。それぞれの教員の多角的な視点で、「高校時代の学習経験は大学での学習経験とどのように関連しているのか」「学年ごとの学習成果の獲得感の変遷」「卒業予定者調査から見るキャリアのための大学での学び」について、それぞれ考察をご紹介します。

### 【1】高校時代の学習経験は大学での学習経験とどのように関連しているのか

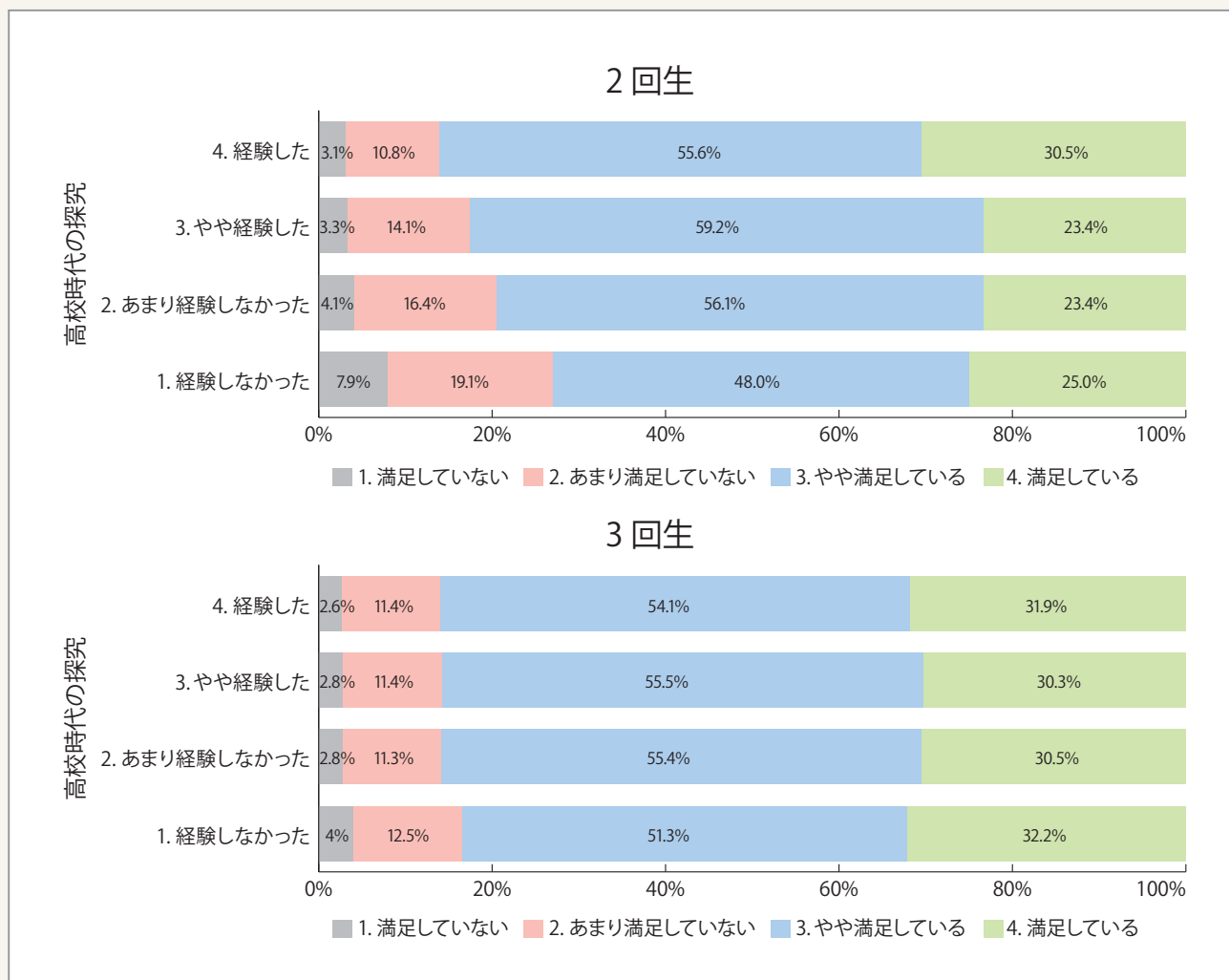
一般に、高校での学習と大学での学習は大きく異なると言われる。高校での学習が知識の習得を重視する一方、大学は自律的で探究的な学習が重視されます。このギャップをスムーズに接続するために、本学でも多くの学部で基礎演習等の初年次導入科目が開講されています。一方、近年は高校でも探究学習の実践が進み、大学入学前から自律的な学習を後押しする取り組みが進められています。こうした高校時代の学習経験は、大学入学後の学習経験とどのような関連があるのでしょうか。

この点に注目するために、学びと成長調査で尋ねている高校時代の学習経験と大学時代の正課の学習の満足に関する回答をまとめました。対象は、2022年度に入学し、入学時調査に回答した者のうち、2023年度の在学生調査に回答した2回生3951名と、2024年度の在学生調査に回答した3回生2889名です。高校時代の学習経験は、「実社会と学習内容との関連を考える機会」の経験を探究的な学習の経験として注目しました。図は、高校時代の探究経験（「経験しなかった」から「経験した」の4段階）別に、大学時代の正課の学習の満足度（「満足していない」から「満足している」の4段階）を集計したものです。

これらの図からは、次のことが言えそうです。第1に、2回生時点では、高校時代に探究的な学習を経験した学生ほど、大学での学習に満足する傾向が見られます。ただし、その差は大きいものではなく、高校時代に探究的な学習を経験していない学生であっても7割以上の学生は、大学での学習に満足しています。大学では自律的な学習を求める授業が多くなるため、探究的な学習をあまり経験してこなかった学生の中には、大学での学習に満足を得られない者がいるのかもしれませんが。基礎演習のような導入科目が必修化されるなど、大学への導入教育が充実してきたとはいえ、一部の学生には追加的な支援が必要かもしれません。

第2に、3回生時点では、2回生のような傾向は見られません。全体での大学での学習への満足も約85%へ若干伸びています。大学での学習に慣れる中で、高校までの学習経験とは独立に大学らしい学習の経験を重ねたことに対する満足を反映している可能性があります。

これらの結果から、低回生の学習支援をより充実させることを検討してもよいでしょう。基礎演習等の導入科目の充実が進められてきたとはいえ、学生が履修する科目全体をみると講義科目がまだまだ多すぎるのかもしれません。あるいは、探究学習の経験が浅い学生にとっては現在の導入科目では難易度が高いかもしれません。その一方で、高校段階で探究学習を経験してきた学生に、入学後の早い段階から研究活動や自律的な学習の機会をどのように増やしていくかも検討する価値があるでしょう。



## 【2】学年ごとの学習成果の獲得感の変遷

はじめに

本調査を開始した2016年から2024年の間、大学教育のあり方は大きく変化してきました。例えば、授業におけるICTの活用やオンライン授業の導入、学生の主体的な学びを促すためのアクティブラーニングの推進など、さまざまな観点から教育改善が進められています。こうした環境下で、本学の学生はどのような力を身につけているのでしょうか。本レポートでは、学生はどのタイミングでどのような能力を獲得しているのかを明らかにするために、1回生から卒業時までの各時点における学習成果獲得感の推移を分析し、学生の成長過程について検討をおこないました。長期的な視点をもって今後の学習計画を検討する助けになれば幸いです。

なお、本分析では卒業予定者に対する学びと成長調査(2018年から2023年)および在学生に対する学びと成長調査(2018年から2024年)のデータを用いました(有効回答数 111,020)。学習成果の獲得感の指標として、学習成果に関する質問項目(4件法、全24項目)を使用しています。具体的には、「専門的素養」「グローバル」「課題解決」「他者との協働」「コンピュータ&情報」「自己理解&キャリア」のカテゴリから構成され、大学における学びの成果を包括的に捉えるための指標となっています。

### 1. 学年ごとの学習成果獲得感の推移

まず、全体的な傾向を確認するために、学年ごとに学習成果獲得感の平均得点をまとめた結果を表1に示します。全体的な傾向として、低回生時点での得点が低く、4回生や卒業生時点での得点が高いことがわかりました。特に、「専門的素養」や「コンピュータ&情報」では、低回生と上回生の間で顕著な差が確認されました。

次に、学年を独立変数、学習成果獲得感の平均得点を従属変数とした多変量分散分析を行ったところ、すべての項目で $p < .001$ となり、有意に差があることが確認されました。以降では、特に特徴的な傾向が見られた項目を取り上げ、多重比較(Tukey法)を行った結果をもとに、学年ごとの推移の詳細を見ていきましょう。

表1 学年ごとの学習成果獲得感の推移(平均値)

| カテゴリ  | 質問項目                             | 1回生  | 2回生  | 3回生  | 4回生  | 卒業生  | $\eta^2$ |
|-------|----------------------------------|------|------|------|------|------|----------|
| 専門的素養 | 1. 専門分野の知識や技能が身についている            | 1.91 | 2.69 | 2.88 | 3.04 | 3.09 | 0.33     |
|       | 2. 専門分野の知識や技能を活用することができる         | 1.94 | 2.44 | 2.64 | 2.84 | 2.94 | 0.22     |
| グローバル | 3. 外国語／母語以外の言語を読み書くことができる        | 2.57 | 2.80 | 2.76 | 2.78 | 2.78 | 0.02     |
|       | 4. 外国語／母語以外の言語を聞き話すことができる        | 2.32 | 2.58 | 2.56 | 2.60 | 2.61 | 0.02     |
|       | 5. 国際的な視野が身についている                | 2.34 | 2.62 | 2.68 | 2.78 | 2.80 | 0.05     |
|       | 6. 自分とは異なる価値観を受け入れることができる        | 3.39 | 3.41 | 3.44 | 3.53 | 3.51 | 0.01     |
|       | 7. うまくいくかわからないことにも意欲的に取り組むことができる | 3.07 | 3.04 | 3.11 | 3.28 | 3.29 | 0.02     |
|       | 8. 状況に応じた目標を設定できる                | 3.07 | 3.06 | 3.12 | 3.27 | 3.29 | 0.02     |
| 課題解決  | 9. 目標に照らした計画を立てることができる           | 2.92 | 2.94 | 3.01 | 3.18 | 3.20 | 0.02     |
|       | 10. 状況に応じて目標や計画を修正することができる       | 3.02 | 3.03 | 3.09 | 3.25 | 3.27 | 0.02     |
|       | 11. 筋道を立てて、論理的・批判的に考えることができる     | 2.89 | 2.93 | 3.01 | 3.16 | 3.19 | 0.03     |
|       | 12. 図表や数値データから情報を読み解くことができる      | 2.72 | 2.79 | 2.85 | 2.99 | 3.06 | 0.03     |
|       | 13. 自分の意見を図表や数値データを用いて表すことができる   | 2.46 | 2.63 | 2.72 | 2.90 | 3.01 | 0.06     |

| カテゴリ      | 質問項目                            | 1回生  | 2回生  | 3回生  | 4回生  | 卒業生  | $\eta^2$ |
|-----------|---------------------------------|------|------|------|------|------|----------|
| 他者との協働    | 14. 他者と協力して目標達成に取り組むことができる      | 3.27 | 3.22 | 3.24 | 3.38 | 3.36 | 0.01     |
|           | 15. 自分の意見を説得的に他者に伝えることができる      | 2.86 | 2.94 | 3.00 | 3.16 | 3.18 | 0.03     |
|           | 16. 他者の意見を受けて自分の意見を柔軟に修正できる     | 3.19 | 3.20 | 3.24 | 3.37 | 3.37 | 0.01     |
| コンピュータ&情報 | 17. 書籍や論文を通じて必要な情報を収集できる        | 2.76 | 2.94 | 3.02 | 3.16 | 3.25 | 0.06     |
|           | 18. インターネット等を通じて必要な情報を収集できる     | 3.16 | 3.25 | 3.30 | 3.38 | 3.42 | 0.02     |
|           | 19. コンピュータを用いて文書や発表資料を作成できる     | 2.55 | 3.12 | 3.23 | 3.37 | 3.40 | 0.17     |
| 自己理解&キャリア | 20. ものごとの善悪について自分なりの価値観を持っている   | 3.43 | 3.42 | 3.44 | 3.52 | 3.51 | 0.00     |
|           | 21. 自分の経験を振り返り、客観的に分析することができる   | 3.13 | 3.17 | 3.21 | 3.34 | 3.35 | 0.02     |
|           | 22. 他者と比較した際の自分の特徴がわかる          | 3.03 | 3.08 | 3.11 | 3.27 | 3.27 | 0.02     |
|           | 23. 社会の中で自分が果たそうと思う役割がイメージできる   | 2.60 | 2.67 | 2.74 | 3.03 | 3.07 | 0.05     |
|           | 24. 大学で学んだ内容と実社会との関連を説明することができる | 2.55 | 2.71 | 2.82 | 3.03 | 3.08 | 0.06     |

## 2. 「専門的素養」に関する学習成果の獲得過程

低回生と上回生の差が最も大きかったのがこのカテゴリです。「1. 専門分野の知識が身についている」では、1回生の平均が1.91 ( $SD=0.776$ )、卒業予定者の平均が3.09 ( $SD=0.639$ )で、有意に上昇していることが確認されました( $F(4, 111015)=13509.735, p<.001$ )。同様に、「2. 専門分野の知識や技術を活用することができる」においても、1回生の平均が1.94 ( $SD=0.823$ )であったのが、卒業予定者では2.94 ( $SD=0.682$ )に上昇しています( $F(4, 111015)=7612.552, p<.001$ )。学年が進むにつれて専門分野の知識が深化し、それを実際の問題解決に適用できるようになっていることが分かります。

この結果から、早い段階から基礎的な知識をしっかりと身につけることの重要性が示唆されます。1・2回生では基礎的な知識や技術を確実に習得し、その後の専門的な学びの土台を固めましょう。3回生や4回生で、より専門的な知識・技術を身につけ、プロジェクトや卒業研究などを通じて実践的に活用できるようになることを目指しましょう。

## 3. 「グローバル」に関する学習成果の獲得過程

このカテゴリでも、学年が上がるにつれて学習成果の獲得感が向上する傾向は確認できましたが、学年ごとの差をみるといくつか特徴的な傾向が見られました。まず、「3. 外国語／母語以外の言語を読み書くことができる」では、1回生の平均が2.57 ( $SD=0.823$ )、2回生の平均が2.80 ( $SD=0.771$ )と有意に上昇しています( $F(4, 111015) = 411.512, p<.001$ )。しかし、大きな上昇はみられず、平均得点はほぼ横ばいとなっています。一方、「4. 外国語／母語以外の言語を聞き話すことができる」では、1回生の平均が2.32 ( $SD=0.847$ )で最も低く、卒業予定者の平均が2.61 ( $SD=0.873$ )で最も高いという結果になりました( $F(4, 111015)=640.904, p<.001$ )。

このように、同じ外国語であっても、技能によって獲得の時期がことなることが明らかになりました。この結果から、外国語の習得においては、まず1回生のうちに読み書きの能力をしっかりと習得し、2回生以降は外国語を用いたコミュニケーションやプレゼンテーションのスキル向上にも力を入れていくことが望ましいといえます。本学では、授業に加えて、BBP (Beyond Borders Plaza)を中心とした語学習得をサポートするためのプログラムを提供しています。ぜひ、こうしたリソースも有効活用して、語学スキルの習得に役立ててください。

### 【3】卒業予定者調査から見るキャリアのための大学での学び ～期待を持って人生の次のステップに進むために～

大学において学問を修めることは目的でもあり、卒業後のキャリアのための手段でもあります。卒業予定者調査のデータを基に、在学時の学びと卒業時のキャリアとの関係性について調べてみると、卒業時に、選択した進路に期待感を抱いていた先輩方には、共通する3つのポイントがあることが明らかになりました。みなさんが卒業するときに、自らのキャリアに期待を持って人生の次のステージに進めるように、先輩方の学びの特徴を参考にしてください。

**データ** 2018年～2023年に実施された卒業生予定者に対する学びと成長調査のデータ(有効回答は17,479件。回答年度に有意差なし)

**分析手法** 重回帰分析(強制投入法)

**目的変数** 卒業後のキャリアに対する期待感( $M=3.15$ ,  $SD=0.685$ ,  $\omega=.835$ 。「選択した進路には満足している」「選択した進路に関して、明確な将来設計を描くことができる」「選択した進路で、自分の力を発揮できと思う」の3項目の平均値)

#### ポイント1 早い段階から将来の目標や見通しを持とう！

将来の目標や見通しを意識し、進路に迷うことのなかった先輩ほど、選択した進路に期待感を抱いていました。

**【キャリア】モデル**  $R^2=.316$ ,  $F(2,17476)=4033.06$ ,  $p<.001$   
**説明変数** 将来の目標・見通し  $\beta=.423$ ,  $p<.001$   
 進路の迷いなし  $\beta=.231$ ,  $p<.001$

漫然と大学生活を送っては、期待を持って人生の次のステージに進むことはできません。早い段階から将来どのようにになりたいのかを考えて目標を定め(キャリアプランニング)、目標から逆算して大学における学びや経験をデザインして取り組むことが重要です。受験勉強でも志望校・志望学部を見据えて、そこに合格できるように勉強してきたことと同じです。

#### ポイント2 主体的・協同的な学びに真面目に取り組む、キャリアに必要な力を得よう！

主体的・協働的・勤勉的に学習していた先輩ほど、選択した進路に期待感を抱いていました。

**【学習過程】モデル**  $R^2=.144$ ,  $F(3,17475)=983.06$ ,  $p<.001$   
**説明変数** 主体的学習  $\beta=.192$ ,  $p<.001$   
 協働的学習  $\beta=.170$ ,  $p<.001$   
 勤勉的学習  $\beta=.088$ ,  $p<.001$

また、自己理解&キャリア形成、課題解決、他者との協働、専門的素養を向上させた先輩ほど、選択した進路に期待感を抱いていました。

**【学習成果】モデル**  $R^2=.213$ ,  $F(6,17472)=787.76$ ,  $p<.001$   
**説明変数** 自己理解&キャリア形成  $\beta=.276$ ,  $p<.001$   
 課題解決  $\beta=.161$ ,  $p<.001$   
 他者との協働  $\beta=.091$ ,  $p<.001$   
 専門的素養  $\beta=.053$ ,  $p<.001$   
 グローバル  $\beta=.017$ ,  $p<.05$   
 コンピュータ&情報  $\beta=-.082$ ,  $p<.001$

授業で得られることは、学問的な知識ではありません。学習活動を通して得られる体験もまた、重要な学びなのです。近年、「主体的・対話的で深い学び」が重視されています。選択した進路に期待感を抱いていた先輩方ほど、授業に主体的・協働的・真面目に取り組むことで、自己理解、課題解決、協働といったキャリア形成に必要な基礎的・汎用的能力を向上させていました。

### ポイント3 授業のことは授業内で。仲間と課外活動や将来に向けた勉強に打ち込もう！

正課に満足し意欲的だった先輩ほど、選択した進路に期待感を抱いていました。

【正課の学び】 モデル  $R^2=.112, F(2,17476)=1101.77, p<.001$

説明変数 正課の満足  $\beta=.209, p<.001$

正課の意欲  $\beta=.177, p<.001$

また、授業外に資格学習、課外活動、自主学習、仲間との学習に取り組んだ先輩ほど、選択した進路に期待感を抱いていました。

【授業外時間】 モデル  $R^2=.031, F(5,17473)=111.443, p<.001$

説明変数 資格学習  $\beta=.097, p<.001$

課外活動  $\beta=.080, p<.001$

自主学習  $\beta=.042, p<.001$

仲間と学習  $\beta=.042, p<.001$

予復習・課題  $\beta=.001, ns$

正課の学びについて、選択した進路に期待感を抱いていた先輩ほど、意欲的に授業に取り組み、満足感を得ていました。一方、授業外では予復習や課題ではなく、仲間と一緒に授業以外の学びや経験に多くの時間を割いていました。期待を持って人生の次のステージに進むためには、充実感が得られるように意欲的に授業に取り組むことが大切です。ただし、タイパという言葉があるように、時間は有効に活用しなければなりません。授業に関することはなるべく授業の中で済ませ、放課後の時間は、ボランティアやサークルなどの課外活動、また、資格や採用試験など将来に向けた勉強に費やすのが効率的ということです。

いかがだったでしょう。みなさんが卒業するときに、選択した進路に満足し、展望を持ち、自らの力を発揮できると確信できるためのヒントが、これまでに卒業された先輩方のデータにありました。早い段階から卒業後のキャリアを定め、学習活動の中で社会に出てから必要な力を磨きつつ、授業外の時間は仲間と一緒に課外活動や将来のキャリアに向けた勉強に費やす。そうすれば、期待を持って人生の次のステップに進むことができるでしょう。大学での学びは、みなさんの将来のキャリアのために(も)あるのです。



立命館大学

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1

発行日：2025年3月 編集・発行：立命館大学 教学部教学推進課